

心理科学総合研究所構想

① ビジョンの概要

「こころ」の科学的研究は重要である。様々な学問分野とも深く関係しており、人間研究と言い換えることもできる。「こころ」を探究する上で脳科学や情報科学を融合した研究機関が必要である。時代の要請でもある学際領域として心理科学総合研究所構想を提案する。

② ビジョンの内容

「こころ」と社会の関わりは、コロナ禍を経て近年益々重要性を増している。その基礎研究が求められているが対応する組織がない。日本の主要な研究大学には本格的な心理学部は存在せず、心理学教育は断片的な形でしか行われていない。これは、心理学という一学術分野における問題にとどまらず、日本で文理融合が進みにくい大きな要因ともなっている。心理学は「こころ」という人文・社会科学のテーマを行動データに基づく科学的手法で扱うという意味で文理をつなぐ要の位置にあり、日本はその要が不在のまま文理融合を目指す状況になっている。こうした現状を踏まえて、行動研究のための国立の心理科学総合研究所を創ることを提案する。欧米諸国においては、心理学は常に時代の最先端の知と切り結ぶ

ことで発展してきた学術分野である。基盤として脳科学やAIなどの現在の最先端の知と連携することでCSTIなどが提言している文理をつなぐ総合知を確立するための要の役割を果たすことができる。ソクラテスは自己を知れと述べ、アリストテレスは、人間は社会的動物だと述べたが、この自己と社会を結ぶのが社会脳である。

「こころ」と社会を社会脳研究に置き換えることもできる。「社会的存在としての脳（社会脳）」の仕組みを、人文社会科学も取り込んだ視野から捉え直す必要がある。自己と対峙する社会との軋轢によって生まれるストレスやコンフリクトは、調和的社会からの人々の逸脱を招きがちである。ストレスを軽減し、健全で豊かな社会性を保持するには、社会脳の仕組みを解明し、その機能を高めてその適応力やレジリエンスを回復させねばならない。そのための基礎研究がとても重要である。他分野との研究連携も重要であり、グランドビジョン「ヒトの知性を知る、創る、活かすための学術の創生」の役割は益々重要になっている。「こころ」の研究は、ヒトの知性を知る、創る、活かすために非常に重要である。心理科学総合研究所を中心とする「こころ」の解明はその中心的な基礎研究であり、グランドビジョン実現のための大きな可能性を秘めている。

③ 学術研究構想の名称

心理科学総合研究所構想

④ 学術研究構想の概要

「こころ」とは心を研究する哲学、文学、心理学から生理学、脳科学、神経科学、情報科学等、関係する学問分野は限りなく広い。日本国民の誰もが「こころ」について知りたいと思っても、直球で答えることのできる機関が存在しない。国立の機関として心理科学総合研究所を設立してこころの研究に関するリーダーシップの役割を果たし続けられる組織の確立を目指す。「こころ」を追求する上で心理学を中核に脳科学や情報科学も融合した総合研究機関が必要である。日本学術会議「脳と意識」分科会から提言「融合社会脳研究の創生と展開(2017)」を発出し、重点大型研究計画マスタープラン2020において「融合社会脳研究センター構想」を提案して融合領域で採択された。第25期から「心の総合基礎分科会」も立ち上がり、心理学の将来について熱く議論していく中で、融合領域で基礎研究としての「こころ」を多元的に研究する機関が必要であるとの合意が形成された。それに基づき心理科学総合研究の設立構想を新たに提案する。

⑤ 学術的な意義

「社会的存在としての脳（社会脳）と心」の仕組みを、人文社会科学も取り込んだ視野から捉え直す必要

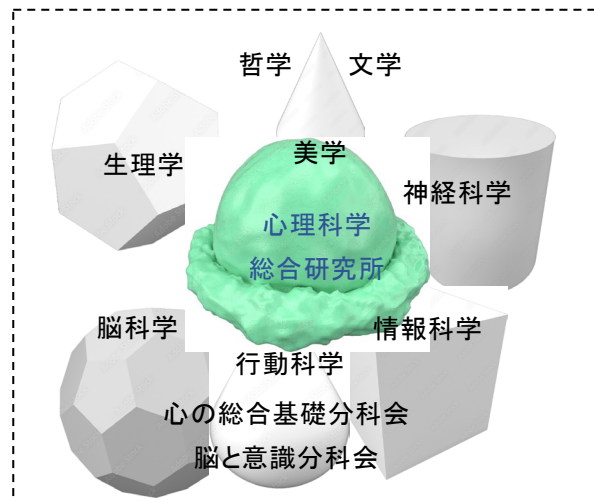


図1 心理科学総合研究所構想

がある。心と行動の関係を明確にするのが基礎心理の得意とする研究手法である。提案の背景には逼迫した現代社会の問題意識がある。ストレスを軽減し、社会からの逸脱を防ぎ、健全で豊かな社会性を保持するには、未解明の社会脳の仕組みを心と行動の関係から解明し、その機能を高めて適応力や復元力を回復させねばならない。心の前頭葉基盤を探索する心理学と連携した新しい人文社会科学群、医学や人工知能（AI）、社会ロボット学など認知科学的アプローチをとる情報学が相互に連携して心理科学を基盤とした新学問体系を確立することが喫緊の課題となる。「こころ」の研究は、心と行動の研究である。研究成果は、社会意識の衰退を招く学習・発達などの前頭葉障害、レジリエンスの欠如、いじめ、虐待やギャンブルを含むプロセス依存症などの社会適応不全などの予防や回復についての問題解明にも貢献するものである。多くの精神疾患は心理科学を基盤とした社会脳をめぐる環境要因を心理・社会的観点から検討してゆくことで予防できる。脳と心と行動の関係に注目するには、人文社会諸科学を融合させて先端研究を展開し、他では不可能な新学術領域を開拓する必要がある。ブレークスルーとなるポイントは従来の脳研究が単独脳理解であったものを自己と他者を含む複数の人々のインタラクティブな複数脳の理解にも展開している点である。このために研究の中心となる大きな研究施設として心理科学総合研究所の設置が必要である。

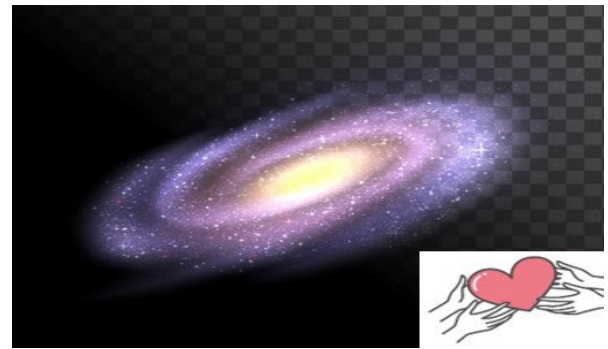


図2 時間と空間の広がりをもつ心理科学総合研究所
大きな視点からの心理科学ネットワークの形成

⑥ 国内外の研究動向と当該構想の位置付け

国内外の研究動向をみると、前頭葉が道徳的判断と関与し、そこが社会脳の司令塔であることが明らかになりつつある。社会脳研究は神経心理学、神経倫理学や神経哲学など、異分野融合性をもつ新たな学問分野に展開しつつある。複数名の協力作業で、各々の脳活動を測定すると、前頭葉が神経同期し、複数の脳の働きが協調的な脳の活動に収束してゆくことも示されており、自己と他者を協調的に結ぶ融合性が示されている。融合社会脳の革新的な新領域を含む心理科学総合研究所はオーソドックスな研究所構想であるが、国内には心理科学を中心とした大規模研究所はなく、欧米や中国からも大幅に遅れている。

「心理科学総合研究所」創設の意義は心と行動の観点から新たな知を開拓し、人文社会系の人間の心についての豊かな沃野を、fMRI や新技術などの理系のクワ（脳イメージング技術）で深く耕し、そこに新たな学問を創生するという文理融合の融合性と挑戦性にある。細分化された知を文理横断的に俯瞰する総合性が認められ、異分野の研究者の協働を促す点で融合性を持ち、卓越した国際性を併せもつことになる。

⑦ 社会的価値

「こころ」に関連する問いにストレートに答えることのできる心理科学総合研究所設置は国民の理解も容易に得られる。そこから産み出される先端基礎研究と、関連諸分野との融合研究の結果として知的価値を生み出し、経済的・産業的価値を高める効果も期待できる。何より心の病で苦しんでいる国民を救い、活力有る人材を再生できることで日本の明るい未来へと期待を持たせることが可能となる。

⑧ 実施計画等について

10 年間の実施スケジュールと経費見積もりを下記に列举した。

心理科学総合研究所建設に 50 億、設備に 34 億、10 年間の運営経費 50 億、高速ハブネットワーク構築に 50 億を見積もっている。総経費は 184 億円。心理科学総合研究所を新たに設立してそこが実施の機関となる。国内外の関連施設と連携して 5G ネットワーク体制を整備する。また、国内の関連研究機関と高速ハブネットワークで結ぶことで、ウェブなどで共同研究を進める。日本国内の心理科学総合研究所設立構想であるが、世界的広がりをもつ開いた研究所にする構想である。異分野の研究者のディスカッションをもとに、具体的な研究テーマを洗い出し、協力体制を構築する。心理科学総合研究所としては、地下にイメージング装置を設置し、フロア（1 階）に融合オープンラボフロアを置き異分野の研究者がオンラインで社会的インタラクションができる社会脳の実験環境を構想している。心理科学総合研究所は運営委員会のもと、先端基礎研究、融合研究、社会展開の 3 部門を設置して実施体制とする。

⑨ 連絡先 坂田 省吾（広島大学）